進学に必要な情報を８言語で分かりやすく説明する動画を初めて作成した。

２回目：進学ガイダンス、学ボラ報告と現状・課題に関する意見交換

まず、冒頭、栃木県教育委員会より、外国人生徒向けの特別措置制度の条件緩和と入試問題文にひらがなのルビを振ることを検討している旨報告があった。昨年度２回目の協議会で栃木県教育委員会へのルビ振り要望案について集中的に議論した。一刻も早く導入されることを願っている。

県内の高校進学ガイダンス開催状況を共有するために、HANDS 主催の２回のガイダンスと佐野市・栃木市・小山市開催ガイダンスについて関係者より報告があった。佐野市と栃木市は教育委員会、小山市は市民団体が主催している。HANDS は、栃木市・小山市ガイダンスに HANDS が作成したガイダンス説明資料を提供している。地域開催拡充のために、ガイダンス資料が有効活用されることを願っている。

今回、初めて２名の学生に参加してもらい、学ボラの体験を語ってもらった。大学院地域創生科学研究科２年の李美香と１年の荘敏霖である。２人とも中国人留学生で李美香は小学校３年の中国人児童、荘敏霖は中学校３年の中国人生徒を学習支援している。２人の話から、少しでも学校生活を楽しく過ごしてもらいたいという気持ちで献身的に活動を続けていることが強く伝わってきた。

意見交換では、昨年度や今年度希望する高校に進学できなかった生徒が何人かいたという現状が紹介され、高校進学の厳しさを改めて突き付けられた。この点に関して、外国人児童生徒教育拠点校（通称拠点校）に指定されている中学校が少ない、漢字の多い問題文の理解が難しいとの意見も出た。また、小学校入学前の就学時検診において親子ともども日本語能力の判定が必要との意見をはじめ、様々な課題が出された。

コロナ禍の影響で、年度当初計画したことのいくつかは実現できなかった。このような状況だからこそ、支援や交流はより必要なのではないか。状況を見守りながら、様々な工夫をしていきたい。

「多言語による高校進学ガイダンス」
コロナ禍での多言語による進学ガイダンス

多文化公共圏センターコーディネーター　鄭　安君

2020 年度は新型コロナウィルス（以下、コロナ）の影響により、多言語による高校進学ガイダンスは通常の対面形式のガイダンスのほか、オンライン形式のガイダンスをも試みた。本報告書は初挑戦となるオンライン多言語による高校進学ガイダンス開催の概況およびガイダンス全体を通して強く感じたことをまとめる。

2020 年多言語による高校進学ガイダンス

	ガイダンス名称	開催団体等	日時・会場	参加家族	対応言語（通訳）
1	オンライン多言語による高校進学ガイダンス	宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター	9/21（月）オンライン開催（ZOOM）	7 家族	スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語（タガログ）、ベトナム語、中国語、タイ語
2	栃木県高等学校進学フェア 2020（多言語による高校進学ガイダンス）	下野新聞社主催への参加	9/22（火）マロニエプラザ（宇都宮会場）	18 家族（生徒 19 人）	スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語（タガログ）、ベトナム語、中国語、英語、やさしい日本語
3	令和２年　多言語による進学・学校生活ガイダンス	栃木市教育委員会と共催	10/3（土）栃木市役所	7 家族	スペイン語、ネパール語、フィリピン語（タガログ、ビサヤ）

コロナ対策に対応できるスペースが確保しにくい課題により、9月21日に予定されていた下野新聞社主催の栃木会場での多言語による高校進学ガイダンスが中止となった。コロナの影響で、日本各地の多言語による進学ガイダンスが次々と中止され、ウェブサイトに資料や動画などのアップで対応するところが多かった。一方、外国人児童生徒および保護者のコロナ禍での学びや進学に対する懸念や不安がさらに高まっていると教育関係者から聞く。そのため、本センターは、HANDS事業ウェブサイト「だいじょうぶ net.」を通して、多言語資料および動画を公開するほか、個別の質問にも対応できるオンライン多言語による高校進学ガイダンスを開催することにした。

初めてのオンライン開催に向けて、ガイダンス諸関係者は議論を兼ねて、開催方法を検討した。ガイダンスの役割を最大限に発揮し、かつ感染症予防をもできるように、本センターに開催本部を立ち上げ、言語ごとにZOOMミーティングを設定し、参加者（家族）と各言語の司会進行担当、通訳担当、説明担当をつなぐことにした。開催当日には、運営中心メンバーのみが大学に集まり、十分な感染対策を取りつつ、運営状況や質問情報を確認しやすい形でガイダンスを進めた。また、説明担当者と通訳担当者が対応しやすいように、言語ごとに午前の部（10：00～13：00）と午後の部（14：00～17：00）に分けた。申込数は11家族があったが、家庭の急な事情などで実際には7家族が参加した。

ガイダンスは、まず司会進行者が全体の流れを説明し、パワーポイントとZOOMを組み合わせて作成した多言語進学ガイダンス動画を流して、参加者に高校進学の基本情報を確認してもらってから、各々の質問に答えるという構成であった。インターネットの状況や必要機材の不足などでうまくZOOMに入れない参加者もいたが、運営メンバーが電話およびLINEなどのSNSを通して臨機応変に対応した。急遽参加できなくなった家族に対しては、次の日の対面式のガイダンスの案内や「だいじょうNET.」の情報伝達などで対応した。

今年度のガイダンスで強く感じたことは2つある。1つ目は、国籍に関係なく、保護者が子どもの教育に対して非常に熱心であること。数名の保護者から事前に参加申し込みの確認連絡があったほか、個別の質問時間をぜひ多く確保したいと切望する保護者もいた。ガイダンス中に保護者は時間の限りに熱心に質問し、昨年に続いて2度目に参加する家族もいた。多言語による高校進学ガイダンスは、情報提供の場だけではなく、言語のハンディキャップを持つ外国人保護者にとって、大切な情報の確認の場と相談の場にもなっていることを見受けられる。

2つ目は、参加生徒の多くは中学3年生で、迫る受検（受験）に不安が高いこと。オンラインガイダンスには7人のうち4人、下野新聞主催の対面ガイダンスには19人のうち15人、栃木市教育委員会との共催対面ガイダンスには7人のうち3人が中学3年生であった。そのなか、日本に来て1年前後である生徒は少なくなく、日本語でうまく自己表現ができない生徒もおり、どのように数ヶ月後の受検（受験）に立ち向かえるかと心配する生徒本人および保護者がかなりいた。「定時制高校にも入れない場合にはどうすれば良いのか」、「栃木県の特別措置の受け入れ条件の来日3年以内を僅か3か月ほど超えている。一般の受検には非常に不利なので、どうすればよいのか」と切羽詰まった様子で質問する保護者がいた。このような課題に対して、外国人児童生徒教育推進協議会での議論を経て、昨年（2020年）3月HANDS事業から栃木県高校入試の学力検査問題へのルビふり要望書を出した。

総じて、将来の学びおよびキャリアの展望に不安を感じる外国人生徒および保護者が非常に多いと見受けられる。一方、ガイダンスについて問い合わせをしてきた学校教諭からは、学校現場ではこうした生徒たちの進学指導に非常に苦慮していると聞いた。多言語による高校進学ガイダンスは外国人生徒や保護者、そして学校現場など、多様な視点からの課題を収集する場にもなっている。

個別の相談が増えているなか、それに対応できる情報の収集と確認、対応の仕方など、さらに工夫しなければならない。そして、コロナの

収束はまだ時間がかかると予測されるなか、オンラインによるガイダンスの開催は今後も継続する可能性が高い。今回のオンライン開催でインターネット環境が整えていない、または必要機材が不十分な家族が少なくないと確認した。次の開催を向けて、各学校や各市町村教育委員会と連携し、参加希望家族への支援をさらに構築する必要があると考えられる。

9月22日（火）の栃木県高等学校進学フェア2020
多言語による高校進学ガイダンスでの相談風景（マロニエプラザ）

「多言語による高校進学ガイダンス」
多言語高校進学ガイダンスへの感想

国際学部国際学科1年　Kaneshiro Teixeira Linda Katherine

初めにHANDS事業の多言語高校進学ガイダンスに参加させていただいて感謝を申し上げます。最初は高校進学ガイダンスに参加することで、どのように親御さんと受験生たちになにをどう話せばいいか迷いました。ブラジル人学校を卒業した私には受験や高校選択などの経験が全くないので、ガイダンスを受けに来た人たちのためになにができるのだろうかとガイダンス当日までに悩んでいました。

準備のために、ネットで受験生の悩みなどについて調べたり、以前ガイダンスに参加したことがあった久富リサさんにもアドバイスを求めたりしました。それから日本の高校についての基本的な知識を身につけることにしました。親御さんにどんな質問をされても答えられるようにしたかったからです。

ガイダンス当日非常に緊張しました。最初のブラジル人の家族の相談を久富さんとともに聞きました。経験がある彼女の話の流れに注目しながら話を聞きました。次にもう一家族が来たので、早速自分が一人でガイダンスをすることになりました。男子中学生の母は大きい悩みを抱えていると言いました。息子は勉強が嫌いで、高校に進学できるかどうか心配であると言っていました。私は事前にいろいろ調べたりしたが、外国人生徒にしかわからない問題を無視していたことに気づきました。私も共感できる「日本語の壁」でした。男子中学生と直接話すことがあまりできなかったが、「とにかく勉強が嫌い」と言われました。親と同じように工場で働ければいいという考えも持っていました。それに対してお母さんは残念な気持ちになっていることに気づきました。私は自分の経験について話し、男子中学生に共感してもらいたかったです。自分の好きなことを探す重要さについて話し、どのような高校があるのかを説明しました。

このような問題はアイデンティティに関する問題だと思います。自分はブラジル人なのになぜこのような勉強をしなければならないのか、日本で育てられたが学校では「外国人」としか認識されていない、社会に出ても外国人は工場などでしか働けないとういう考え方によって「勉強が嫌い」になるのではないかと思います。対策としてはインクルージョン教育、つまり外国人児童生徒のニーズに合わせることが必要であると思います。自分も同じ経験をしたので、大学で得た知識を通して、彼らのために何とかしたいという気持ちがあります。